

平成30年度第4回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

平成31年2月20日(水) 11時00分 ~ 12時06分

岐阜県庁舎 4階特別会議室

2 出席者

知事 古田 肇

教育長 安福正寿

委員 稲本 正

委員 野原正美

委員 竹中裕紀

委員 近藤恵里

(森口祐子委員は欠席)

3 関係者

岐阜女子高等学校 安江満夫

4 オブザーバー

副知事 河合孝憲

清流の国推進部長 兼山鎮也

副教育長 内木 禎

5 陪席

清流の国づくり政策課長 辻川和希

教育総務課長 平野孝之

6 議事録

別紙のとおり

議 事 録

発 言 者	発 言 内 容
清流の国 推進部長	<p>これより平成30年度第4回岐阜県総合教育会議を開催する。</p> <p>本日は、部活動のあり方について、昨年末に行われた「第71回全国高等学校バスケットボール選手権大会」において3年ぶり、2度目の優勝を果たされた岐阜女子高等学校バスケットボール部監督の安江満夫様にお越しいただき講話いただくこととしている。</p> <p>その後、「次期大綱」についてご説明させていただく。</p> <p>質疑や意見交換については、講話、説明の後に一括して行いたいと考えている。</p> <p>なお、お配りしているあんぱんと抹茶マフィン、岐阜清流高等特別支援学校からご提供いただいた。学習の一環として、生徒自らが焼き上げて、地元の方々への喫茶サービスの中でも提供されているものなので、是非ご賞味いただきたい。</p>
ゲストスピーカーによる説明	
安 江 氏	<p>私は43年間現場に立たせていただいているが、生徒と関わる中で感じていることをいくつかお話しさせていただく。</p> <p>私は、昭和51年に新卒で岐阜女子高等学校に赴任させていただいたが、最初はバスケットボール部がなく、ソフトボール部が活動していた。なぜか校長から「安江先生はバスケットボールを長年やっていたので、ソフトボール部をやりなさい」と指示があり、ソフトボール部の顧問を務めた。その時に感じたことは、素人であるからこそ、いろんな強みがあるということ。例えば、何も分からないから気軽に聞くことができた。試行錯誤の中、1年間活動したが、どうしてもバスケットボールがやりたいと校長に直訴し、2年目にバスケットボール部を立ち上げた。</p> <p>最初は、グラウンドの隅に屋外用のコートを買ってもらったが、雨が降ると練習ができないので、廊下の片隅で椅子にマネージャーにボールを持って立たせ、それに飛びつくという練習を必死にやっていた。子どもたちと一生懸命やるのがとても楽しかった。バスケットボール部を立ち上げた時、120人集まったが、翌日は60人になり、その翌日にはまた半分になり、1週間後には7人か8人になり、そこから始まった。</p> <p>そんな風にやっていたが、今は、県の支援などもあり、練習環境は非常に整っている。今も生徒たちには、現在の環境に感謝するよう言っている。</p> <p>環境に感謝することがなぜ必要なのかを教えなくてはいけない。好きなことが当たり前でできることが当たり前ではなく、卒業生が1つひとつの結果を作り上げ、今に至っているのであり、環境に感謝する、謙虚な心を持たせないと、ステップアップはできない。子どもたちを指導するなかで、努力を積み重ねるひたむきな心を養っていく必要があると思っている。</p> <p>先ほど、声をかけたら120人集まったと話したが、私が若くて独身だった</p>

から集まったのであって、指導者としての魅力は全くなかったと思う。指導できる生徒がいるから指導者としての立場があるのであり、そこをはき違えてしまうととんでもないことになってしまう。「俺がいるからチームがある」のではなく、教える生徒がいるから初めて我々は指導者として指導させてもらっているという気持ちは、この年齢になっても持ち続けている。もちろん、生徒に媚を売ったりすることはないが、心構えとして必要なことだと思う。

長年指導させてもらっている中で、できることと身に付くことの違いを認識する必要があると思っている。例えば、ある技術を教えてやらせると結構できるようになってくる。ところが、翌日同じことをやらせてみると、ほとんどできないのが現状。よくここで勘違いするのは、あれだけ教えたのになぜできないのかと思い、苛立ったり、中には怒りを覚える指導者もいる。生徒たちが昨日できたのは、指導して教えた結果できたのであって、決して身に付いてきたものではない。よく中学校の先生方も視察に来られるが、いくら一生懸命教えても、ご飯を食べたら半分忘れ、一晩寝たらまた半分忘れる。今日教えたことは、明日には4分の1くらいになっていると思ってまた翌日指導すればいいと思っている。うまくできなくて当たり前で、教えてすぐにできるわけではない。身に付かせることの必要性。特に、バスケットボールという競技自体が習慣性の強い競技であり、「good habit」と言われるが、良い習慣をいかに身に付けさせるか、指導の中でも重要だと思っている。

初めて全国大会に出場したのは平成元年で、今から30年くらい前だが、その頃は、初出場の岐阜女子高等学校ということで、夏休みに実業団や大学などいろんなチームが集まる練習会に声をかけてもらい、参加した。その時に見た光景で、ある県の高校のチームは、ゲーム中に怒鳴り散らすような指導をしていた。そこに、同じ県の全国大会に出るような中学校が来たのだが、同じような指導をしていた。それを見た時、県の中で、1位の学校の指導方法が最も正しい方法とみなされるのだろうと思った。この指導は、元気はいいが、個人的には少し違うのではないかと思ったので、上に立つものの責任として、自分自身に戒めを持った次第である。

また、現在、県内外からバスケットボールをやりたいと来てくれるが、バスケットボールだけを教えていればいいのかというと、そうではない。バスケットボールを目的に来てくれるのだが、それを教えても、受け入れる器をつくってあげる必要があると常々思っている。受け入れる心を育てるという内面的な指導の必要性を感じている。

その中で、気づく力というのは重要だと思っている。バスケットボールのゲームは、攻防によって状況がどんどん変わっていく。ベンチでああしろ、こうしろと言うよりも、次の展開が速いので、選手たちがその状況を判断する必要がある。12月に開催された「第71回全国高等学校バスケットボール選手権大会」の決勝戦でも、一度もタイムアウトを取らなかった。普段の練習の時も、笛を吹いてゲームを止めるが、敢えて指示を出さないようにしている。指示を出したいのだが、敢えて出さない。選手たちがどう対応するべきか、日ごろから自分たちで気づく訓練をさせている。一概には言えないが、相手を思いやるとか、周りや仲間を思いやるのが大切だと思っている。

スポーツは、できなかったことができるようになっていくことが面白さや魅力の一つである。今日できなくても、明日練習してできるようになっていくという、成功体験の積み重ねが子どもたちを成長させるための一つの方法だと思う。

最後に、女子高なので、全員ではないにせよ、彼女たちは、何年後かには母親になり、子どもを育てる立場になる。教え子たちがバスケットから離れた時に、指導者として何を残してあげられるのか。母親になり、子どもを育てる時

	に、「先生が言っていたのはこのことなんだ」と気づいてくれれば、自分の指導した思いが生徒たちに継承されていけば、指導者として本望だと思っている。
次期大綱の策定について	
清流の国づくり 政策課長	資料 2-1、2-2、2-3 により説明
清流の国 推進部長	<p>意見交換に入る前に、本日ご欠席の森口委員から、事前にご意見をお伺いしているので紹介させていただく。</p> <p>基本目標 4 「学校・家庭・企業・地域の連携強化や多様な人材の活用」に関して、交通ルールや登下校、公共施設のマナーについても地域で子どもや親も含め教えていく必要がある。</p> <p>基本目標 5 (3) 「優秀な教職員の確保・資質能力の向上」に関して、研修とひとくくりになってしまっているが、どういった能力をどのように育成していくのかがわかりにくいので、目的をより明確に記載することができないか。</p> <p>基本目標 6 (4) 「健康・体力づくりの推進」に関して、学生時代に部活・クラブ等でスポーツに親しみ、基礎的な体力を備えることは生涯の健康づくりにつながるものと考えてるので、そういった目的意識を加えてほしい。</p> <p>以上、3 件のご意見をいただいた。</p>
意見交換	
稲本委員	<p>生徒への体罰については、先生をどう処分するかなどの、ネガティブな議論が多い。</p> <p>私は昔、野球少年で、物凄く殴られていたが、先生のなかには、その頃の感覚が抜けない人がいるのかもしれない。安江先生のように、将来子どもたちが大人になった時のことを思って部活動を指導する先生はまだ少ないのではないか。</p> <p>生徒の自主性に任せるのではなく、殴ってでもいいから勝たせようという指導者も多いのではないかと思う。</p>
安江氏	<p>現実的には、大声で怒鳴れば指導したように錯覚してしまう指導者は多い。「今あなたがやっていることはおかしい」ということを言ってくれる人が少なく、なかなか気が付かない先生が多い。大声を張り上げればさも指導したように錯覚してしまい、できないから腹を立て、その延長が体罰や暴力に繋がっていくのではないかと思う。</p> <p>私自身、そういった指導者に対して、出来る限り声を大にして「おかしい」と言える立場になろうと思っている。</p>
稲本委員	<p>ぜひお願いしたい。</p> <p>体罰の問題は、数カ月に 1 度のペースで起きている。教育委員会としては、起きた体罰をどう処分するかの議論が必要になる。部活の先生の意識が変われば、教育委員会としても前向きな仕事に取り組める。</p>
竹中委員	安江先生のやり方で生徒がついてきて、全国で勝てるようになるには、まだ

	まだ別の秘密があるのではないか。
安江氏	<p>生徒たちがやりたくなるように仕向けている。</p> <p>例えば、生徒たちは自主的に朝練を行うが、練習する子と練習しない子がいると、練習せざるを得なくなる。「練習せよ」と言ってしまったら終わり、なるべく生徒たちがやりたくなるように仕向けようという思いを持っている。</p>
知事	<p>ある学校の話をご紹介させていただく。ある分野で全国制覇を続けたが、日本一になるために大変な練習をこなし、いわばスパルタ的な指導を行っていたとのこと。そこで、生徒がついていけないということで、指導する先生を替えた。</p> <p>今は、新しい先生の指導のもと、明るく和気あいあい取り組んでいるが、成績は、全国制覇どころか、県内でも優勝できず、低迷している。</p> <p>一方、厳しい指導を行っていた先生は、その分野では無名の学校へ赴任したが、今ではその学校が県代表として全国大会に出場している。</p> <p>何かをなす時に、普通のことをやっていて勝てるはずがない。勝つためには、相手を上回る何かを身に付けなければならないし、頂点に立つには、大変な努力が必要。その上、安江先生に対しては、今や勝つだけでなく、勝ち続けることが期待されている。勝ち続ける指導をしているからこそ、県外やアフリカからも生徒が集まってきているのではないか。</p> <p>また、高校野球は既に中学のレベルで全国的にひとつのマーケットを形成しており、生徒の争奪戦になっている。そこで、選ばれた生徒たちが異なる県の代表として甲子園で同窓会をやっているようなもの。</p> <p>甲子園の常勝監督が口を揃えておっしゃるには、岐阜県には素晴らしい生徒がたくさんいるが、優秀な指導者を求めて県外に出て行ってしまおうとのこと。そして、この監督に鍛えてもらいたい、この監督の元で野球をやりたいと子どもたちに思われる人を育てるべきとされている。</p> <p>安江先生としても、勝ち続けると同時に、指導者の育成も考える立場になっているのではないか。</p> <p>一方で、最近、横浜DeNAベイスターズの筒香選手が、逆の立場から、「勝ちにこだわる甲子園はおかしい」と問題提起していることにも注目したい。</p> <p>ところで、岐阜女子高等学校は、先発メンバーのうち、岐阜県出身者はどれくらいいるか。</p>
安江氏	2週間前に新チームが東海大会で優勝したが、スタートメンバー12名のうち、岐阜県出身者は2名である。
知事	昨年チームはどうか。
安江氏	岐阜県出身者はいない。
知事	岐阜女子高等学校へは、全国どころか、アフリカからも安江先生を慕って生徒が集まって来ている訳ですね。

安江氏	<p>競技力の向上に重要なのは、指導者の熱意ではないかと思う。</p> <p>勝つ先生は、勝つ方法を知っていると思う。私自身も、県内ではこのことをやれば全国大会にいけるという目安は自分なりに持っている。3～4年連続で県大会で勝つようになった頃、目安が分かった。</p> <p>ただ、方程式があるわけでも、本を読んでわかることでもなく、生徒たちとしっかり向き合って、指導者が生徒の思いを感じ、生徒が指導者の思いを受け止めるというコミュニケーションが取れないと結果は出てこないと思う。指導者の思いが結果につながっていくと思う。</p>
知事	<p>安江先生は、日本語が全く分からないアフリカの子を預かってどんなふうに指導しているのでしょうか。</p>
安江氏	<p>ちょうど一昨日まで、2年生の生徒をセネガルに里帰りさせ、一緒に親に状況報告をしてきた。</p> <p>留学生を何人か預かっているが、必ず親にお会いして預かるようにしている。</p> <p>言葉が分からなくても、思いは必ず通じるものがあると思う。留学生は大変なこともあるが、言葉が通じないからこそ、お互いに学ぶものがあると思う。</p>
野原委員	<p>外国から来ている生徒たちは、最初の頃は相当な苦労があったと思うが、日本の子どもたちも彼女らの存在に影響を受け、相乗効果で子どもたちが育っていくのではないか。</p>
安江氏	<p>まさにその通りで、互いに気づかなければならないことがたくさんある。</p> <p>最初から全部うまくいくよりも、困難があった方が互いに譲歩したり、身振り手振りで、逆にコミュニケーションが取りやすい。</p> <p>日本人同士で言葉が通じててもコミュニケーションが取れなかったり、毎日顔を合わせているにも関わらず親子でもコミュニケーションが取れない家庭もある中で、言葉がないからこそ、コミュニケーションが取れることもある。</p>
野原委員	<p>今後外国人労働者の受け入れが増えていく環境変化の中で、この異文化交流の経験が卒業後も活かせるのではないか。</p>
稲本委員	<p>アフリカから生徒が来ているというのはすごいこと。アフリカから来ている生徒は自主性が高く、日本の子もそこから刺激を受ける。</p> <p>大綱は岐阜県のビジョンの1つであり、「はじめに」において、『清流の国ぎふ』の未来を担う人材の育成に「世界を見据えた」という言葉を入れてもらいたい。ICTやAIは世界に繋がるためにある。岐阜の強みは、自然と文化。岐阜は、教育に関してもポテンシャルが高い。</p> <p>大綱は、生徒をどう教育するか、という視点で書かれているが、先生の教育も重要である。地元と世界の両方を見据えた教育者の育成が重要なので、明確に記載すべき。</p>
近藤委員	<p>安江先生は、後継者の育成には取り組まれているのか。</p>
安江氏	<p>生徒を指導するのに精一杯だが、岐阜県で勝つようになって、そのようなことも考えた。指導者の問題が大きいと思っている。</p>

	<p>ある人は、「岐阜に日本一の高校のチームがあるのに、なぜ岐阜県の先生は岐阜女子高等学校を見に行かないのか。」と言う。この週末も、愛知県や三重県、以前は東京や関西から、県を跨いで中学生が来てくれた。岐阜県の中学生を遮断していたわけではなく、どんどん来てくださいというスタンスだが、敷居が高いと言われる。だが、決して敷居が高いわけではなく、敷居は自分で作ってしまっているもの。</p> <p>中学生が来てくれると、グループ分けして、高校生を指導者にして中学生4～5人を指導させる。私の狙いの一つとしては、私の指導がどの程度高校生に伝わっているかというバロメーターになるということもある。指導者には、自ら育つ意識が必要。</p>
近藤委員	先生方にも自主性が必要ということか。
安江氏	そのとおり。一時期、出向いたこともあるし、声をかけていただければ、できるだけ出向き、伝えようと思っている。ぜひ、自分から来てほしいと思っている。
知事	いま、岐阜県にはスーパースというバスケットボールの男子のプロチームができており、先日初めて試合を観戦した。それ以上に、岐阜でスポーツを語るのであれば、日本一の岐阜女子高等学校のバスケットボールを観るべき、全国屈指のチームは何が優れているのか、感じるところがあるはずであると、いろいろな方に勧めている。
稲本委員	<p>大綱に話を戻すが、「はじめに」の中で、『清流の国ぎふ』の未来を担う人材の育成」の前に「世界を見据えた未来を担う」とか、世界に繋がる言葉を入れるとよい。『清流の国ぎふ』だけだと、地元しか見ていないように思う。</p> <p>また、そのすぐ下、「ICTも」は付け足したような印象があるので、「ICTを」として強調するべきである。</p>
竹中委員	<p>大綱を見て、一番良いと思ったのは、グローバルに活躍するには、やはり、郷土に根ざしたアイデンティティーを持つ必要があり、まさしくそのとおりだと思う。その辺がしっかりしていないと世界と戦っていけない。</p> <p>もう一つの武器がICT。ICTを導入すると、現場が良くなるといった程度の話ではなく、最初は情報量が格段に上がるなど、あっという間に教育の現場が変わってしまうことになると思う。</p> <p>例えば、アマゾンなどを見ても、個人をターゲットにしたきめ細かい商売を行っており、教育の現場も、将来は一人ひとりに見合った教育を行っていくことになるだろう。</p> <p>また、少子高齢化で、教育予算のほとんどを人件費が占めるなかで、これから次の予算の使い方や教育現場を充実させるためには、ICTを活用し、テレビ授業を当たり前とし、専門教育を個々に受けられるようにしていくことも考えられる。</p> <p>岐阜商業高校を視察した際、簿記や会計の専門分野は、eラーニングのように勉強していたが、自分から勉強できる環境を整え、個々に専門教育を受けられるようになっていくのではないか。</p> <p>大綱に関しては、集団生活や倫理の観点も必要だが、授業については、今までのように1クラス全部を先生が見るのではなく、専門分野ごとに分けて実施するなど、専門教育の充実が必要になるだろう。こうした夢の部分は大綱かビ</p>

	ジョンに盛り込んでいくと、5年先が画期的になるのではないか。
稲本委員	<p>今までの授業のやり方のままでICTを道具として多少利用するというニュアンスで捉えている先生が多いと思うが、そうではなく、教育の中身まで変わる。何を見てもすぐ世界が入ってくる。日本の中で『清流』がよいのではなく、世界で見ても『清流』は素晴らしい。岐阜県は世界の中で最も清流が優れている。常に世界との比較となる。</p> <p>「教育目標1(3)」の中で、木育についても、「ぎふ木育」ではなく「新ぎふ木育」であり、今までは、木とおもちゃが主体の木育だったが、森林全体を見るようになってきている。ぎふの木育は、今、日本で進行している木育のずっと上を行っているという意識を明確に持った方がよい。先日開催した「恵みの森づくりコンソーシアム講演会」で林野庁の本郷さんや隈さんが仰っていたが、そこに注目しているのに、現場は逆戻りしようとしているように思う。</p> <p>先ほど、安江先生の話にあった「身に付く」に関して、自然環境を守る前に、自然環境を体験してその良さを実感し、様々な知識や技能を身に付けて、実際に守っていくことができるのではないか。体験教育が優れているのは、聞いたことは忘れる、見たことは時々思い出す、身に付いたことは忘れないと言われている。身に付ける教育こそが環境教育であり、ふるさと教育にも結びつくものである。</p> <p>「基本目標3 主体的に学び考える力の育成」で、生徒たちが自分で目標を立て、主体的に取り組むことが重要。自主性の一言で記載するのではなく、子どもの将来的な目標を強調しなければ、主体的な学びは実現しない。</p>
教育長	安江先生には、素晴らしい話を聞かせていただいた。教育委員会では、働き方改革を進めており、教員の場合、残業時間を月45時間以下にする目標があり、土日の部活動指導が大変苦しくなっている実情がある。短い時間で効率的な指導を行うには、顧問の指導力が大事になってくるので、安江先生のノウハウを学んでいきたい。
知事	<p>様々なご意見をいただいたので、本日のご意見を踏まえ、最終的な手入れをして大綱を仕上げていきたい。</p> <p>なお、大綱では理念を中心に記載しているが、お配りしている参考資料には、具体的な事業、施策を記載している。これもご覧いただき、ご意見いただければと思う。また、これらの事業に参画するなど、積極的にご利用いただければと思う。</p>
清流の国推進部長	これをもって本日の会議を終了する。